

第16回（令和2年度）  
教育システム改善のためのアンケート調査報告書

令和3年8月

有明工業高等専門学校  
自己点検・評価委員会

## 目次

1. まえがき .....	1
2. アンケート結果およびその分析 .....	5
2.1 5年生卒業時アンケート .....	5
2.2 専攻科修了時アンケート .....	16
2.3 新入生アンケート .....	19
2.4 4年次編入生アンケート .....	23
3. あとがき .....	25

### 付録 アンケート内容と集計結果

- 付録1 5年生卒業時アンケート（令和元年1月実施）
- 付録2 専攻科修了時アンケート（令和元年1月実施）
- 付録3 新入生アンケート（令和2年3月実施）
- 付録4 4年次編入生アンケート（令和2年12月実施）

## 1. まえがき

本校では、教育理念に基づいて設定された学習・教育到達目標を達成できるように教育プログラムを設計・作成し、日々の教育活動を展開しています。この教育プログラムに沿って教育を実践している本校の教育システム(教育体制)は、常時、点検・評価を行い、その結果を検討・分析し、継続的に改善を施し、向上させて行く必要があります。

自己点検・評価委員会(以下、本委員会)は、本校の教育システムの点検、分析そして改善・向上の一環として、7種類のアンケート(一部隔年)を実施しています。学内では、卒業・修了直前の本科5年生・専攻科2年生、4年次編入生の3種類、学外では、OB・OG(本校卒業生)、企業(本校卒業生の就職先企業)、新入生および2年生の保護者\*の4種類です(詳細は、表1を参照)。そして、これらのアンケートの結果を集計、分析し、改善点を「教育システム改善のためのアンケート調査報告書」(以下、調査報告書)として作成・公開し、教育システム改善・向上の一端を担ってきました。

本年度は、昨年度末からのコロナ禍の影響により、遠隔授業や分散登校の実施など本校の教育活動も大きな影響を受けましたが、後期から本委員会の活動も可能となり、何とかこの報告書の作成が可能となりました。今回の調査報告書の対象は前述の7種類のアンケートの内、R元年度の卒業・修了直前の本科5年生・専攻科2年生、R2年度4年次編入生そしてR2年度新入生を対象としたものの4種類のアンケート調査を実施しています。本年は学内の学生の変化の様子を見るのが中心のアンケート調査となっており、学生の意識や行動の変化を把握する目的を持つと同時に、次回の機関別認証評価に向けた分析データの集積の性格を持った調査となっています。

本調査報告書は、各アンケートをそれぞれ集計し、主に前年度(又は前回)の結果と比較し分析を行いました。\*2年生の保護者に対するアンケートはH18年度からH22年度まで実施

表1 アンケート実施・分析状況一覧

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第1回	H14年度	H15年1月	H14年度専攻科修了生	H16(2004)年 3月	JABEE 作業部会
		H15年2月	H14年度本科卒業生		
	H15年度	H15年7月	OB・OG		
		H15年11月	主な就職先企業		
第2回	H15年度	H16年1月	H15年度専攻科修了生	H17(2005)年 6月	JABEE 作業部会
		H16年2月	H15年度本科卒業生		
	H16年度	H16年6・9月	OB・OG		
第3回	H16年度	H17年2月	H16年度専攻科修了生	H18(2006)年 6月	学校運営 検討委員会
		H17年2月	H16年度本科卒業生		
	H17年度	H17年12月	OB・OG		
		H17年12月	主な就職先企業		
第4回	H17年度	H18年1月	H17年度専攻科修了生	H19(2007)年 7月	学校運営 検討委員会
		H18年2月	H17年度本科卒業生		
	H18年度	H18年4月	H18年度新入生保護者		
		H18年7月	H18年度2年次保護者		

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第5回	H18年度	H19年1月	H18年度専攻科修了生	H20年(2008) 6月	学校運営 検討委員会
		H19年2月	H18年度本科卒業生		
	H19年度	H19年4月	H19年度新入生保護者		
		H19年4月	H19年度4年次編入生		
		H19年8月	H19年度2年次保護者		
		H19年12月	OB・OG		
		H19年12月	主な就職先企業		
		H20年2月	H19年度専攻科修了生		
		H20年2月	H19年度本科卒業生		
		H20年3月	H20年度新入生保護者		
		H20年度	H20年4月		
H20年9月	H20年度2年次保護者		H20年(2008) 9月	(追加版)	
第6回	H20年度	H21年2月	H20年度専攻科修了生	H21(2009)年 9月	学校運営 検討委員会
		H21年2月	H20年度本科卒業生		
		H21年3月	H21年度新入生保護者		
	H21年度	H21年4月	H21年度4年次編入生		
		H21年8月	OB・OG		
		H21年8月	主な就職先企業		
第7回	H21年度	H22年2月	H21年度専攻科修了生	H23(2011)年 7月	学校運営 検討委員会
		H22年2月	H21年度本科卒業生		
		H22年3月	H22年度新入生保護者		
	H22年度	H22年4月	H22年度4年次編入生		
		H22年9月	H22年度2年次保護者		
		H23年2月	H22年度専攻科修了生		
		H23年2月	H22年度本科卒業生		
		H23年3月	H23年度新入生保護者		
		H23年度	H23年4月		
	第8回	H23年度	H23年9月		
H23年9月			主な就職先企業		
H24年2月			H23年度専攻科修了生		
H24年2月			H23年度本科卒業生		
H24年3月			H24年度新入生保護者		
H24年度		H24年5月	H24年度4年次編入生		

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第9回	H24年度	H25年1月	H24年度専攻科修了生	H25(2013)年 7月	学校運営 検討委員会
		H25年2月	H24年度本科卒業生		
		H25年3月	H25年度新入生保護者		
	H25年度	H25年4月	H25年度4年次編入生		
第10回	H25年度	H25年9月	OB・OG	H26(2014)年 10月	学校運営 検討委員会
		H25年9月	主な就職先企業		
		H26年1月	H25年度専攻科修了生		
		H26年2月	H25年度本科卒業生		
		H26年2月	H25年度全学生		
		H26年3月	H26年度新入生保護者		
	H26年度	H26年5月	H26年度4年次編入生		
		H26年7月	H26年度全教職員		
第11回	H26年度	H27年1月	H26年度専攻科修了生	H28(2016)年 3月	学校運営 検討委員会
		H27年2月	H26年度本科卒業生		
		H27年3月	H27年度新入生保護者		
	H27年度	H27年5月	H27年度4年次編入生		
		H27年9月	OB・OG		
		H27年9月	主な就職先企業		
第12回	H27年度	H28年1月	H27年度専攻科修了生	H28(2016)年 9月	学校運営 検討委員会
		H28年2月	H27年度本科卒業生		
		H28年3月	H28年度新入生保護者		
	H28年度	H28年5月	H28年度4年次編入生		
第13回	H28年度	H29年1月	H28年度専攻科修了生	H30(2018)年 4月	学校運営 検討委員会
		H29年2月	H28年度本科卒業生		
		H29年3月	H29年度新入生		
	H29年度	H29年8月	H29年度4年次編入生		
		H29年9月	OB・OG		
		H29年9月	主な就職先企業		
第14回	H29年度	H30年1月	H29年度専攻科修了生	H30(2018)年 12月	自己点検・ 評価委員会
		H30年2月	H29年度本科卒業生		
		H30年3月	H30年度新入生		
	H30年度	H30年6月	H30年度4年次編入生		
		H30年10月	全学生・全教職員		

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第 15 回	平成 30 年度	H31 年 1 月	H30 年度専攻科修了生	R 2 (2019) 年 3 月	自己点検・ 評価委員会
		H31 年 2 月	H30 年度本科卒業生		
		H31 年 3 月	H31 年度新入生		
	令和元年度	令和元年 6 月	H31 年度 4 年次編入生		
		令和元年 10 月	OB・OG		
		令和元年 10 月	主な就職先企業		
第 16 回	令和元年度	R 2 年 1 月	R 1 年度専攻科修了生	R 3 (2021) 年 4 月	自己点検・ 評価委員会
		R 2 年 1 月	R 1 年度本科卒業生		
		R 2 年 3 月	R 2 年度新入生		
	令和 2 年度	R 2 年 12 月	R 2 年度 4 年次編入生		

## 2. アンケート結果およびその分析

### 2.1 5年生卒業時アンケート

平成14年度から実施している「5年生卒業時アンケート」の対象者の推移は、表2-1-1に示す通りである。令和元年4月の5年在籍者数は204名（M:50, E:36, I:45, C:31, A:42）であり、休学者3名および留年者2名を除いて、卒業生数は199名（M:49, E:34, I:45, C:29, A:42）である。卒業生199名を対象としたweb入力アンケートを行ない、59%の学生から回答を得た。新型コロナウイルスの影響で、多くのクラスで一斉実施できなかったこともあり60%程度の低い回答率となった。また、電気工学科では実施することができず、本年度の回答者は0名であった。

表 2-1-1 5年生卒業時アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
平成21年度	平成22年2月	185	171	92
平成22年度	平成23年2月	174	170	98
平成23年度	平成24年2月	193	188	97
平成24年度	平成25年2月	180	177	98
平成25年度	平成26年2月	180	180	100
平成26年度	平成27年2月	198	186	94
平成27年度	平成28年2月	192	172	90
平成28年度	平成29年2月	185	173	95
平成29年度	平成30年2月	184	176	95
平成30年度	平成31年2月	191	186	97
令和元年度	令和2年2月	199	117	59 <small>(新型コロナウイルスの影響)</small>

※ 以下のコメントでは学科名を、機械、電気、電子情報、物質、建築と略記する。

#### 【A：回答者自身に関する設問】

##### ■卒業生数

令和元年度において、5年生は4月時点で204名が在籍しており、休学者3名、留年者2名を除く、199名が卒業している。教務係による統計では、平成27年4月入学時の学生数は207名であり、学科別に（M41, E42, I41, C41, A42）であった。平成29年4月には3年次に留学生（C1, A1）、平成30年4月に4年次編入学生（M3, E0, I1, C1, A1）が加わっている。最終的に、令和元年度の5年次学生に加わった全学生数は、215名であり、その内の93%の学生が卒業している。

「卒業率（平成23年度定義）」と比較すると、平成30年度の84%より10%程度高くなっている。例年は80～90%であり、平成26年に89%と高くなっているが、近年で最も高い卒業率となった。

##### ■卒業後の進路（以降はアンケート回答者からの回答を基にしている。電気の回答は0である。）

卒業生回答者の約73%（85名）が就職しており、平成30年度の69%より4%高くなっている。進学は28%であり、平成30年度の29%、29年度の27%とほぼ同程度であった。そのうち大学に13%（15名）、専攻科に15%（17名）の学生が進学している。特に専攻科の進学率は平成29年度が19%、28年度が15%であったことから、近年は増加傾向であったが微減している。

#### 【B：教育全般の総括に関する設問】

##### ■一般教育について

「満足している」と「おおむね満足している」を加えた回答は全体の89%であり、平成30年度

の92%と同程度である。「満足している」だけを見ると25%であり、平成30年度の39%と比較すると大きく減少している。学科別で「満足している」「おおむね満足している」の割合は、物質、建築で90%を超え、機械、電子情報でも各86%、89%である。前年度と比較すると物質で10%減少し、電子情報で10%増加しており、本年度は全学科において平均的に90%程度となっている。

### ■専門教育について

「満足している」と「おおむね満足している」の回答は全体の94%であり、平成30年度の91%、29年度の93%と比較すると例年通りで高い満足度を得ている。「満足している」の回答は、本年度が32%、30年度が45%、29年度53%であり、本年度は大きく減少していることがわかる。

### ■教育設備について

「満足している」と「おおむね満足している」の回答は全体の86%であり、平成30年度の84%、29年度の83%と同程度である。過去5年間も同程度であることから、全学生からの満足度は比較的高いと考えられる。

### ■校内ネットワークやパソコンなどのICT環境について

本項目は、近年の環境整備において導入された項目である。「満足している」と「おおむね満足している」の回答は全体の65%であり、平成30年度の57%と比較すると8%の上昇となった。学内のネットワーク環境が更新された年であったことも、一つの要因になったと考えられる。

### ■勉強以外の学生生活について

「満足している」と「おおむね満足している」の回答は全体の81%であり、平成30年度の91%、29年度の88%よりも大きく減少している。「存続見直し」や「実施形態の変更」等の大幅な学校行事の見直しが行われたことが要因の一つであると考えられる。また、「満足している」の回答では、本年度が40%、平成30年度が45%、29年度が52%、28年度46%、27年度54%であり、5年間で14%の大きな減少率となっている。

### ■自分自身に実力がついたと思うか

「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」の回答は全体の81%であり、平成30年度の77%よりも微増している。また、平成29年度86%、28年度84%と比較すると同程度であると言える。「身に付いたと思う」の回答は26%であり、平成30年度の33%、29年度の49%と比較すると年々減少している。ただし、平成28年度は22%であることから、毎年の増減が大きいことが理解できる。

### ■卒業要件を知っているか

卒業要件を「知っていた」「おおむね知っていた」の回答は全体の90%であり、多くの学生が知っていたことが分かる。平成30年度が83%であることから7%の増加となった。今後も、多くの学生が卒業要件を理解して取り組むことが期待される。

【C：科目教育に関する設問】

■一般科目

「必要性」に関しては、平成29年度と比較すると多くの科目で必要性の意識が向上しているが、卒業研究で前年を5%下回った。例年73%以下である美術・音楽は、近年の調査として初めて80%に達している。全体としては80%を超えており、教育システムが改善されている結果であると言える。

表 2-1-2 一般科目の「必要性」 単位：%

		M		E		I		C		A		Z	
		今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回
一般科目	国語	92	83	---	91	94	92	97	85	86	95	94	89
	社会	83	70	---	83	83	89	80	71	94	88	84	81
	英語	100	100	---	94	97	97	100	97	100	95	99	97
	化学・物理	83	83	---	80	74	76	100	100	94	73	86	83
	体育	86	85	---	91	89	89	90	91	94	93	90	90
	美術・音楽	78	63	---	77	80	68	70	59	100	90	80	73
	数学（～2）	94	95	---	100	97	100	100	97	94	95	98	99
	物理（～2）	94	98	---	97	94	97	100	97	94	97	97	98
全学科共通科目	情報処理基礎	94	95	---	94	94	97	97	94	100	95	97	97
	工学基礎Ⅰ，Ⅲ	92	90	---	94	86	78	80	76	94	75	89	81
	数学（3～）	94	88	---	91	100	89	100	76	94	93	98	88
	物理（3～）	94	98	---	89	89	84	90	94	100	93	94	92
	卒業研究	89	95	---	91	89	95	93	100	94	98	91	96
	授業外科目	94	88	---	89	94	86	87	91	94	88	92	89

「教育実状」に関しては、「英語」の評価が71%であり、他の科目と比較して低い結果となった。他の科目は85%以上であり、教育システムとして大きな問題はないと考えられる。例年、低い結果である「美術・音楽」は90%となり、平成30年度、29年度と比較して6%増加している。

表 2-1-3 一般科目の「教育実状」 単位：%

		M		E		I		C		A		Z	
		今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回
一般科目	国語	86	88	---	94	94	76	83	85	94	88	89	86
	社会	81	88	---	83	91	86	83	82	88	90	86	87
	英語	86	65	---	89	71	68	50	71	75	70	71	70
	化学・物理	83	78	---	74	89	81	93	100	94	90	89	86
	体育	89	93	---	97	94	95	93	91	94	93	93	93
	美術・音楽	86	75	---	86	91	81	87	79	88	90	90	84
	数学（～2）	92	88	---	100	97	89	97	97	94	95	97	96
	物理（～2）	94	93	---	97	94	100	100	94	81	95	96	97
全学科共通科目	情報処理基礎	92	93	---	91	94	95	93	97	88	95	94	95
	工学基礎Ⅰ，Ⅲ	94	93	---	97	91	81	83	88	94	88	92	91
	数学（3～）	92	95	---	100	97	97	93	97	94	95	95	97
	物理（3～）	94	98	---	94	89	86	97	97	94	93	95	94
	卒業研究	81	90	---	94	89	89	93	100	88	95	88	93
	授業外科目	アンケート項目なし											

「到達度」に関しては、全科目で同程度か減少する傾向が見られた。国語、社会、物理（～2年）では5%の増加となったが、体育、数学（～2年）では5%以上の減少となった。近年の結果と比較すると、全体的には減少傾向であるが学生の到達レベルの考え方の違いによるものを含むと考えられ、今後も経過を観察する必要がある。共通科目では、卒業研究の到達度が9%減少しており、全学科での減少傾向が見られる。必要性においても減少していることを考えると、各学科において、これらの結果を分析した方がいいと考えられる。

表 2-1-4 一般科目の「到達度」 単位：%

		M		E		I		C		A		Z	
		今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回
一般科目	国語	83	83	---	80	83	76	80	74	100	83	85	80
	社会	69	70	---	66	71	68	73	56	88	68	73	67
	英語	64	50	---	71	37	41	37	50	69	58	50	54
	化学・物理	64	55	---	66	60	59	87	97	69	60	69	67
	体育	78	88	---	91	74	89	80	82	94	83	81	87
	美術・音楽	72	63	---	71	60	65	67	53	88	70	70	66
	数学（～2）	89	88	---	100	86	97	90	91	88	93	90	95
	物理（～2）	89	80	---	89	94	73	83	79	69	85	88	83
全学科共通科目	情報処理基礎	89	83	---	91	94	81	87	91	88	91	91	88
	工学基礎Ⅰ，Ⅲ	89	80	---	91	69	76	77	74	94	75	82	81
	数学（3～）	83	88	---	91	86	89	80	76	81	93	84	88
	物理（3～）	86	93	---	80	63	73	80	68	75	80	77	80
	卒業研究	81	90	---	89	69	86	90	97	88	90	81	90
	授業外科目	92	85	---	77	89	76	80	82	81	83	85	83

## ■機械工学科の科目

各科目の「必要性」「教育状況」「達成度」に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合は、以下の通りであった。

令和元年度の科目に関するアンケートにおいて、「必要」あるいは「おおむね必要」と回答した割合は全ての科目で89%～98%であり、平成30年度の93%～98%よりも科目による差が広がっている。個別には制御系科目で4%上昇し、加工系科目では6%減少している。教育の実情では全体的に減少傾向であり、特に制御系、工学基礎系科目で6%と大きく減少した。これに連動して各科目の達成度も最大12%減少しており、減少の要因を分析して、今後、向上させることが期待される。

表2-1-5 機械工学科科目の「必要性」「教育実状」「到達度」 単位：%

科目系	工学基礎系		構造系		加工系	
具体的科目名	工学基礎Ⅲ, 工業力学, 工業英語など		材料学, 材料力学, 機械振動学, 機構と要素, 機械要素設計, 基礎塑性力学など		溶融加工, 精密加工など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	94	93	94	95	89	95
教育実状	89	90	94	98	92	95
達成度	81	90	83	90	81	80

科目系	エネルギー系		制御系		総合系	
科目名	熱力学, 伝熱工学, 水力学, 流体工学, 流体機械, 熱機関工学など		コンピュータ工学, 数値計算法, 電気電子工学, 計測制御, メカトロニクス基礎・応用, システム制御工学など		機械基礎製図, 創造設計演習, 機械基礎実習, 機械創造実習, 機械工学実験, 生産システム工学など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	97	98	97	93	97	100
教育実状	97	95	89	95	94	98
達成度	86	90	78	90	86	90

科目系	機械工学科専門科目計	
年度	令和元年度	平成30年度
必要性	98	95
教育実状	95	95
達成度	85	88

## ■電気工学科の科目

令和元年度は、新型コロナウイルスの影響でクラスの集合機会が減少し、本アンケートを実施することができなかった。そのため、該当年度の結果は無しとなるが、今後も継続的な改善が期待される。

今後の改善や分析を継続的に実施するために、平成30年度のアンケート結果を以下に記載する。

表2-1-6 電気工学科科目の「必要性」「教育実状」「到達度」 単位：%

科目系	電気電子基礎		情報工学系		電力工学系	
具体的科目名	電気基礎, 工学基礎II, 電気磁気学, 電気回路, 電気電子計測など		情報処理, 計算機工学, 計算機工学特論など		電気機器, 電気設計, 電力輸送工学, 電力発生工学, 高電圧工学, パワーエレクトロニクス, 電気材料, 電気法規など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	---	100	---	97	---	97
教育実状	---	100	---	97	---	100
達成度	---	94	---	91	---	97

科目系	電子工学系		電気電子共通		電気工学科専門科目計	
科目名	電子デバイス, 電子回路, 電子物性, 電子設計, 論理回路, 通信工学, 電子工学特論など		電気電子工学演習, 電気製図, 制御工学, システム制御, 機械工学概論, 電気電子工学実験など			
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	---	97	---	97	---	98
教育実状	---	97	---	97	---	98
達成度	---	94	---	97	---	95

## ■電子情報工学科の科目

各科目の「必要性」「教育状況」「達成度」に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合は、以下の通りであった。

「必要性」「教育実状」については、いずれの科目系においても高い数値となっている。「教育実情」についての評価も前年度より改善傾向にあり、すべての科目系で90%以上の数値が得られた。「達成度」もすべての科目系で前年度よりも良い評価が得られているが、電子工学系の演習についての評価は70%台にとどまる。今後の改善や工夫による向上が期待される。

表2-1-7 電子情報工学科科目の「必要性」「教育実状」「到達度」 単位：%

科目系	電子情報基礎		電子工学系		情報工学系	
具体的科目名	工学基礎II, 電子工学基礎, プログラミング, 論理回路など		電気回路 電子回路 電磁気学 半導体工学, 電気電子計測など		アルゴリズム, 情報理論, 数値計算法, 言語処理系, 情報ネットワーク, ソフトウェア工学など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	97	100	89	95	97	100
教育実状	94	89	94	89	94	86
達成度	97	89	77	62	89	73

科目系	総合領域		情報工学系の演習		電子工学系の演習	
科目名	計算機工学, 通信工学, 情報処理システム, 制御工学など		情報工学演習, 電子情報工学演習など		電子工学実験	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	91	84	97	97	91	92
教育実状	94	76	94	92	94	92
達成度	83	62	94	81	77	73

科目系	電子情報工学科専門科目計	
年度	令和元年度	平成30年度
必要性	94	95
教育実状	94	87
達成度	86	73

## ■物質工学科の科目

各科目の「必要性」「教育状況」「達成度」に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合は、以下の通りであった。

多くの科目において90%を越える学生が「必要性」を感じているが、基礎的な工学基礎、物質コース専門科目、生物コース専門科目に関する評価は、90%台に届かない。この結果は前年度に続くことなので引き続き注視が必要であろう。「達成度」について、基礎的な生物、物質コース専門科目、生物コース専門科目は、70%以下の数値を示す。今後の改善や工夫に期待したい。

表2-1-8 物質工学科科目の「必要性」「教育実状」「到達度」 単位：%

科目系	基礎的な化学		基礎的な生物		基礎的な工学基礎	
具体的科目名	工学基礎Ⅱ, 分析化学, 無機化学, 有機化学, 有機化学, 物理化学, 化学工学など		生物化学, 生物工学基礎など		情報処理, 工業英語, 電気工学基礎, 機械工学基礎, 品質管理など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	97	97	93	94	87	85
教育実状	93	100	90	94	87	97
達成度	90	97	67	85	80	79

科目系	専門展開		物質コース専門科目		生物コース専門科目	
科目名	機器分析学, 生物工学基礎, 材料工学基礎, 環境化学, 食品工学, 高分子化学など		機能材料工学Ⅰ, Ⅱ, プロセス工学, 反応工学, 物質工学演習など		生体触媒工学, 生物工学, 微生物工学, 生体高分子工学, 生物工学演習など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	93	100	77	85	80	85
教育実状	93	100	73	88	83	85
達成度	87	91	67	74	70	79

科目系	実験		物質工学科専門科目計	
具体的科目名	共通実験, コース別実験など			
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	97	100	95	95
教育実状	97	100	94	97
達成度	90	91	84	88

## ■建築学科の科目

各科目の「必要性」「教育実状」「達成度」に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合は、以下の通りであった。

「必要性」については、計画系1以外はすべて90%を超える。「教育実状」では、計画系1，構造系2，建築設計演習の3つの科目系で評価値の降下が見られた。「達成度」は、全体的に改善傾向が見られ、今後もこのような動きが継続されることが期待される。

表2-1-9 建築学科科目の「必要性」「教育実状」「到達度」 単位：%

科目系	建築学基礎		計画系1		計画系2	
具体的科目名	造形，工学基礎Ⅱ，コンピュータ・リテラン演習など		建築デザイン，建築デザイン演習，日本建築史，西洋建築史，近代建築史など		住環境計画，都市計画，都市設計，建築計画，建築設計論など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	100	90	84	98	94	98
教育実状	94	93	88	93	94	98
達成度	94	85	81	80	94	85

科目系	環境系		構造系1		構造系2	
科目名	建築環境工学，建築設備，建築設備演習など		構造力学，材料力学，構造力学特論，建築塑性解析，建築振動学など		鋼構造，鉄筋コンクリート構造，基礎構造，構造計画，構造設計演習など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	100	98	100	100	100	100
教育実状	100	95	94	95	88	98
達成度	100	88	94	88	88	88

科目系	生産系		実験		建築設計演習	
具体的科目名	建築構法，建築材料，建築法規，建築測量，建築生産など		建築材料実験，建築実験実習など		建築設計演習，卒業設計など	
年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度	平成30年度
必要性	100	100	100	100	94	100
教育実状	100	98	94	100	88	98
達成度	94	88	94	95	94	80

科目系	建築学科専門科目計	
年度	令和元年度	平成30年度
必要性	98	98
教育実状	94	96
達成度	92	86

## 【D：学習・教育到達目標に関する設問】

「教育の実状」「達成度」は、巨視的に見ると、引き続き良好な結果が得られている。それぞれの詳細を見ると、「教育の実状」について、「適正だった」と「おおむね適正だった」を合わせた割合が、C-2を除くすべての目標で90%を超える。ただし、全教育目標で95%を超えた前年度の結果と比べると、全体的に評価は若干の後退傾向にあると言える。なお、平成29年度は97%であった。

「達成度」に関しては、「身に付いた」と「おおむね身に付いた」を合わせた割合が、A-1を除く全ての目標で80%以上であった。これも、すべての目標で80%以上の結果が得られた前年度に比べると若干の後退傾向にある。

## 【E：その他に関する設問】

### ■TOEIC関係の英語教育

平成27年度から連続して上昇している項目であり、「よい制度」と「それなりによい制度」の合計で、本年度は昨年度と同じ88%であった。学科別に見ると、電気工学科を除く全学科で90%を超える評価が得られている。

### ■2年次の混合学級制度

過去数年と同じく、この設問で、「よい制度」と「それなりによい制度」を選ぶ割合は非常に多く、全学科で92%であり、過去三年度と同程度（平成30年度95%、平成29年度96%、平成28年度95%）であった。

### ■授業外単位制度

平成26年度以降、連続して高評価であった。「よい制度」と「それなりによい制度」とした割合は98%であり、前年度と同じであった。なお、過去三年度（平成30年度98%、平成29年度96%、平成28年度95%）も同程度であった。

### ■追認制度

「よい制度」と「それなりによい制度」という回答は90%という結果で、過去二年度（平成30年度95%、平成29年度93%）よりも若干低い数値を示した。

### ■1～3学年次のLHR

LHRに対する評価は例年、厳しいものであるが、「有意義だった」および「おおむね有意義だった」という回答は62%で、前年度とほぼ同じであった（平成30年度64%、平成29年度75%、平成28年度959%）。

### ■教育行事

「有意義だった」と「おおむね有意義だった」という回答は前年度と同じで87%で、平成29年度の92%から減少している。

### ■シラバスの利用

「利用しなかった」と答える学生は3%で、改善が見られた平成29年度以降、継続してシラバス活用が図られていることがうかがえる（前年度5%）。「利用した」「それなりに利用した」という学生は前年度と同じ76%で、平成29年度の81%より減少している。

### ■レポート等のフィードバックはどうだったか

「適正」と「おおむね適正」との回答は、前年度とほぼ同じで85%であったが、平成29年度の92%よりは減少した。

### ■授業時間外の学習指導体制（補習・オフィスタイム制度）の制度の実状

「必要性」「では、「必要」と「それなりに必要」を選ぶ回答の割合は前年度に引き続き減少傾向

で76%であった(平成30年度82%,平成29年度91%)。「実状」については、「機能していた」と「それなりに機能していた」の回答割合は81%であり前年度より5ポイント上昇した(平成30年度76%,平成29年度91%)。

### ■授業改善アンケートの反映

「よく反映されている」と「おおむね反映されている」の回答の割合は前年度とほぼ同じである75%で、平成29年度の84%に比べると大幅減である(平成30年度72%,平成29年度84%,平成28年度74%)。早急の対応が必要であろう。

### ■学修単位制で科目の中で、授業15時間、自学自習30時間を適用した科目

「意識した」と「ある程度意識した」との回答は42%であり、前年度に続く減少傾向が著しい(平成30年度60%,平成29年度78%)。なお、平成29年度は78%であった。

### ■学校の事務サービス

「よかった」と「おおむねよかった」の回答は、前年度とほぼ同じである78%であった(平成30年度76%,平成29年度88%)。

### ■進路支援

「よかった」と「おおむねよかった」の回答は全学科で91%であり、平成29年度の94%と同程度となった。学科毎に見ると、建築が100%,物質が90%,電子情報が89%,機械が83%であった。なお、平成29年度は、電子情報81%,他学科で88%以上,機械で100%であった。

### ■課外活動

「よかった」と「おおむねよかった」の回答は全学科で92%であり、過去二年度から継続して90%以上を確保できている(平成30年度91%,平成29年度94%)。

### ■学生相談室での対応

学生相談室の利用経験者は全学科で61%であり、過去二年度とほぼ同じであった(平成30年度62%,平成29年度65%)。また、利用したことのない学生の回答を除き、利用経験者の回答に限ってみると、「よかった」と「おおむねよかった」の回答は90%を超えており、しっかりと機能していると評価できる。

### ■寮の運営・指導

「よかった」と「おおむねよかった」の回答は、「入寮経験なし」を除く学生数で見ると67%で、前年度よりも低い(平成30年度73%,平成29年度81%)。なお、平成28年度以前は60%台であった。コメントは10件届いた。

### 【自由意見】

本年度は26件の自由意見が寄せられた。参考までに昨年度は28件、一昨年度は31件であった。内訳は、M5件、E0件、I11件、C8件、A0件であった。内容別には「教育システム」「学校行事」「学校の事務サービス」「ロボコン」に関するものが多かった。「学校行事」に関しては、行事が廃止されている実状を指摘する意見が見られた。

## 2.2 専攻科修了時アンケート

専攻科修了生に対するアンケートは平成 14 年度から実施している。過去 5 年間の実施状況を表 2-2-1 に示す。今回は令和元年度専攻科修了予定者（アンケート時）に対して実施したアンケートに対する分析結果となる。

なお、専攻科学年定員は 20 名（生産情報システム工学専攻：12 名、応用物質工学専攻：4 名、建築学専攻：4 名）であるため、年度により異なるものの、アンケート対象者は全専攻合わせて 20～30 名程度、専攻や系においては数名程度と少数であることに留意する必要がある。また、以後「生産情報システム工学専攻機械系」については単に「機械系」と表記し、「電気系」および「電子情報系」についても同様の表記とする。

表 2-2-1 専攻科修了時アンケート実施状況

	実施時期	修了者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
平成 27 (2015) 年度修了生	2016 年 1 月	27	27	100
平成 28 (2016) 年度修了生	2017 年 1 月	32	32	100
平成 29 (2017) 年度修了生	2018 年 1 月	29	29	100
平成 30 (2018) 年度修了生	2019 年 1 月	26	26	100
平成 31 (2019) 年度修了生	2020 年 1 月	30	21	70.0%

### 【A：回答者自身の専攻と進路に関する設問】

令和元年度の修了生数は 30 名で、その内訳は、機械系(M) 4 名、電気系(E) 6 名、電子情報系(I) 5 名、応用物質工学専攻(C) 6 名および建築学専攻(A) 9 名である。回答者 21 名のうち大学院進学予定者は 14 名、他の 7 名が就職予定者である。図 2-2-2 に平成 27 年度から令和元年度までの修了生数および大学院進学率の推移を示す（回答者のみ）。定員 20 名に対し、毎年 28.8 人(平成 27 年度～令和元年度の平均)の修了生を輩出している。この間、専攻科全体としては安定的に修了生を輩出しているものの、専攻ごとでは大きくばらついていることがわかる。進学・就職の割合は専攻や年度によって大きく異なり、電気系および応用物質工学専攻が比較的高い進学率を保っている。令和元年度回答者については進学率が 66.7% でであった。

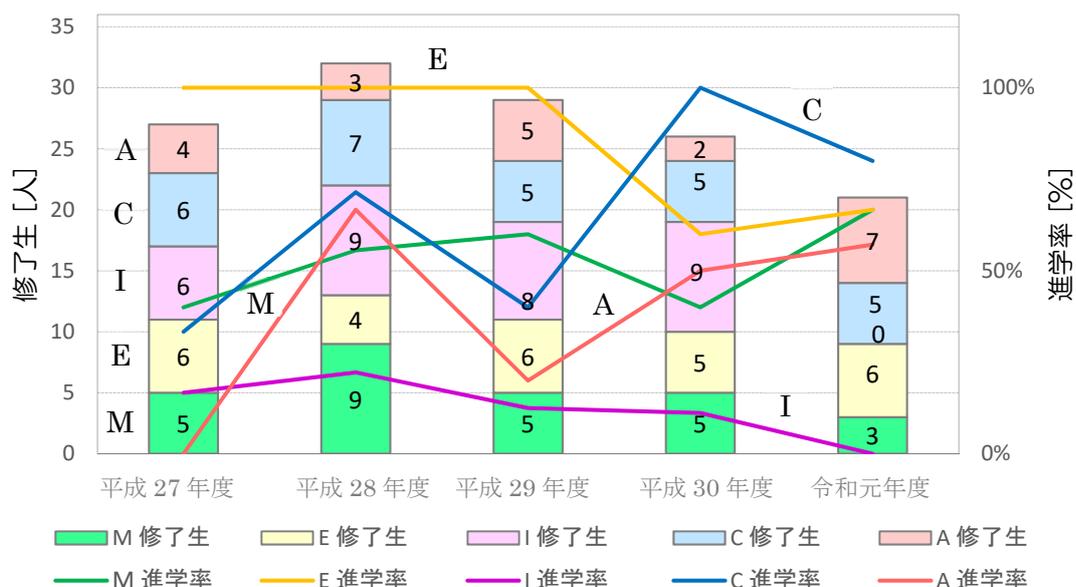


図 2-2-2 専攻科修了生数と進学率（平成 27 年度～令和元年度，回答者のみ）

### 【B：教育全般に関する設問】

一般教育に対する満足度は、回答者の95.2%（昨年度：96.2%）が「満足」または「おおむね満足」と回答しており、昨年同様、高くなっている。専門教育においても同様に「満足」または「おおむね満足」と回答した割合は81.0%（昨年度：84.6%）と昨年度と同様であり、一般教育とともに現状において大きな問題はないと思われる。また、「教育・研究環境」については90.5%（昨年度：84.6%）、「学業以外の学生生活」については回答者の100%（昨年度：100%）が「満足」または「おおむね満足」と回答しており、満足度は高い状態にあるといえる。「期待した実力がついたか」の設問に対して「満足」または「おおむね満足」と回答した割合が85.2%（昨年度：80.8%）と、概ね肯定的な回答の割合が高いことがわかる。

### 【C：各教科の教育に関する設問】

ほとんどの科目において『必要性』、『教育実状』、『達成度』の点から肯定的な回答（いずれの設問においても“1”または“2”と回答）の割合は8割を超え、良好な状況であると考えられる。一方で、創造設計合同演習に対する肯定的な回答が昨年度に引き続き低い状況であった。『必要性』については57.1%（昨年度：69.2%、平成29年度：72.4%）、『教育実状』については66.7%（昨年度：65.4%、平成29年度：65.5%）、『到達度』については66.7%（昨年度：65.4%、平成28年度：58.6%）と、今後も注視する必要がある。また、地域協働関連科目についても、『必要性』の割合が68.4%（昨年度：70.0%）、『到達度』については肯定的な回答の割合が61.1%と低いため、今後も科目の在り方も含めて、検討することが望まれる。

### 【D：本校の学習・教育到達目標に関する設問】

図2-2-3に本校の学習・教育到達目標に対する『教育実状』と『到達度』のアンケート結果を示す。いずれも肯定的な回答（いずれの設問においても“1”または“2”と回答）の割合を示している。昨年度は「A3」（コミュニケーション能力）の『到達度』が76.9%と他と比べると若干低かったが、今年度は全ての学習・教育到達目標に対して、いずれも9割を超える学生が肯定的な回答をしている。

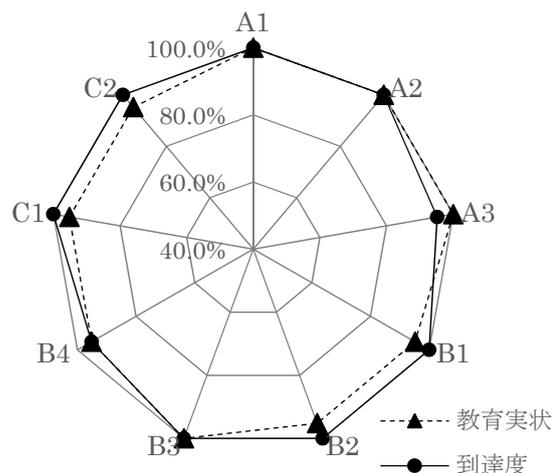


図2-2-3 学習教育到達目標に対する教育実状と到達度

### 【E：その他】

開講されている選択科目の充実については、一般科目で95.2%（昨年度：96.2%）、専門基礎科目で100%（昨年度：96.2%）、工学基礎科目で95.2%（昨年度：96.2%）、複合的・学際的資質育成科目で95.2%（昨年度：100%）の学生が「満足」または「おおむね満足」と回答している。また、少人数の授業形態にも100%（昨年度：100%）の学生が満足しており、選択科目の充実度や授業形態は学生にとって満足できる状況にあるといえる。学生支援の観点において、「授業時間外での教員の対応」、「進路支援」、「学生相談室での対応（利用者は54.2%）」はいずれも100%の学生が満足している。「事務サービス」についても95.2%（昨年度：96.2%、一昨年度：86.2%）の学生が満足しており、学生支援は学生にとって満足できる状況にあるといえる。

一方、TOEICに関する学習支援体制についての満足度は低く、「満足」または「おおむね満足」と回答した学生は57.1%（昨年度：53.8%）であり、国際性を育む教育に重きを置く本校の状況を鑑みると、支援体制の強化は喫緊の課題である。

また、シラバスの利用状況については「利用した」または「それなりに利用した」と回答した割合は71.4%（昨年度：61.5%、一昨年度：62.1%）と低い傾向にある。要因の一つとして、Webシラバス導入による影響の可能性について昨年度の報告書で指摘したところである。Webシラバスの利用促進について検討する必要があると思われる。

研究に関連する設問として「学会等での発表」や「各専攻における特別研究発表」の経験はともに有益であった（「おおむね有益」を含む）と回答した割合が100%と、前年と同様に高い結果となった。

「ポスターセッション」については「満足」あるいは「おおむね満足」と回答した割合は 38.1% (昨年度：76.9%)と減少し、また、企画そのものについても、66.7% (昨年度：23%)の学生が「必要ない」と感じており、半数以上の学生は不満を感じているようである。

「技術士の資格」に関して、その内容に対する認知度は、「よく知っている」または「知っている」と回答した割合が 76.2% (昨年度：31.8%)で、昨年度から大きく減少した。また、資格の必要性については、昨年度と同様に 76.2% (昨年度：73.1%)が必要（「とても必要と思う」または「必要と思う」と回答した。

最後に、昨年度から新たに追加した「専攻科の修了要件の認知度」についての設問について、認知状況は 81.0% (昨年度：96.2%)、修了要件の確認方法については 90.5% (昨年度：96.2%)の学生が「知っている」と回答している。認知度が 100%となるよう、今後も周知を行っていく必要がある。

#### 【課題】

- 1) 創造設計合同演習に対する肯定的な回答が少なく、特に必要性については年々減少傾向にある。その要因を探ることが望まれる。
- 2) 地域協働関連科目の位置付けを、カリキュラム・ポリシーを踏まえて見直す必要がある。
- 3) TOEIC 支援体制の充実が望まれる。
- 4) 学生に対し、Web シラバスの活用を促すような手段を検討する必要がある。
- 5) ポスターセッションの在り方について検討する必要がある。

## 2.3 新入生アンケート

現在までの直近3年間に実施した新入生に関するアンケートの実施時期および回答者数等は表2-3-1の通りである。H28年度までは新入生保護者を対象に本委員会独自でアンケートを実施してきたが、H29年度より新入生を対象とした高専機構主導のアンケートに移行した。アンケートの項目内容は毎年微修正されている。

今回の分析は、令和2年度における新入生を対象とし、以前にも同様の質問項目がある場合はその値を参照・比較する形で行った。

表2-3-1 新入生保護者および新入生アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
H30(2018)年度	H30年3月	新入生207	207	100
R1(2019)年度	R1年3月	新入生209	209	100
R2(2020)年度	R2年3月	新入生209	209	100

\* 前年度からの留年者等を除いた学生(新規入学生)を「新入生」と定義して、本アンケートの対象としている。

### 【回答数および回答率】

本アンケートは3月の入学手続き説明会の際に配布・実施している。回答率は100%であった。実施方法については問題無いと思われる。

### 【(設問1) 有明高専を最初に知った時期】

表2-3-2に有明高専を最初に知った時期に関するアンケートの結果を示す。その他を含めた7つの項目のうち、1つのみ回答可としている。「小学4～6年」が最上位の58名であり、次に「中学2年」が52名であった。後述する(設問4) 関心を持ったきっかけと合わせて参照すると、小学高学年や中学1～2年時に本校のオープンキャンパスに参加し、有明高専のことを最初に知る児童・生徒が多い可能性が高いことがうかがえる。

表2-3-2 有明高専を最初に知った時期(名)

時期	R2	R1	H30
小学校入学前	9	6	3
小学1～3年	15	13	12
小学4～6年	58	50	55
中学1年	43	60	51
中学2年	52	47	50
中学3年	32	33	36
その他	0	0	0

### 【(設問2) 受験検討時期】

表2-3-3に受験検討時期に関するアンケートの結果を示す。R2年度は6つの項目のうち(R1年度までは9つの項目のうち)、1つのみ回答可としている。ほとんどの者が中学校に入学してから検討しており、中学2年から受験を意識している生徒が多いことがうかがえる。

表2-3-3 受験検討時期(名)

時期	R2	R1	H30
小学1～3年	6	2	1
小学4～6年	25	7	18
中1	36	28	27
中2前半	58	20	24
中2後半		45	35
中3第1学期	84	56	50
中3第2学期		46	46
中3第3学期		5	6
その他	0	0	0

【(設問3) 受験決定時期】

表 2-3-4 に受験決定時期に関するアンケートの結果を示す。8つの項目のうち (R1年度までは9つの項目のうち), 1つのみ回答可としている。ほとんどの者が中学校に入学してから, 特に中学3年の第1~2学期に決定していることが分かる。

表 2-3-4 有明高専受験を決定した時期 (名)

時期	R 2	R 1	H30
小学1~3年	14	0	1
小学4~6年		2	5
中1	17	5	10
中2前半	9	5	12
中2後半	23	11	19
中3第1学期	65	56	42
中3第2学期	72	110	96
中3第3学期	9	20	21
その他	0	0	1

【(設問4) 関心を持ったきっかけ】

表 2-3-5 に関心を持ったきっかけに関するアンケート結果を示す。21の項目から (R1年度は19の項目から, H30年度は20の項目から) 5つまでを回答可としている。年度によって多少の差があるが, 「オープンキャンパス・見学会」, 「パンフレット」, 「家族・親族」が例年上位を占めている。本校が地域の方々や身内から期待を寄せられていることが認識できる。一方, 上記以外の項目も幅広く回答があり, 関心を持ってもらうには, オープンキャンパスなどで学校に直接来てもらうことも紙面などを利用した幅広い広報活動もともに大切であることが分かる。

表 2-3-5 関心を持った経緯 (名)

項目	R 2	R 1	H30
高専主催説明会	57	51	69
進路相談会 (進路相談会)		11	
体験入学	39		43
オープンキャンパス・見学会	100	125	85
学校行事 (高専祭・体育祭等)	65	54	37
高専体育大会	7	6	9
ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン	35	27	39
公開講座	2	0	2
出前授業・訪問実験	6	6	5
地域イベントなどでの科学体験教室	4	2	9
パンフレット	84	87	83
ホームページ	75	82	72
中学校主催説明会	36	35	28
家族・親族	126	115	102
中学教師	26	32	27
友人・先輩	44	45	51
塾	31	26	18
新聞・雑誌・漫画等情報誌	4	0	4
TV・ラジオ	4	1	0
動画サイト, SNS など	12	10	8
進学情報サイトなど	22		
その他	5	1	2

【(設問5) 志望動機】

表 2-3-6 に志望動機や感じていた魅力に関するアンケートの結果を示す。26 の項目 (R1 年度および H30 年度は 25 の項目) から 5 つまでを回答可としている。R2 年度は突出していなかったものの、例年通り「早期専門教育」と「就職の実績」が上位となった。また、「5 年一貫教育」も高い数値を示しており、高専を志望する生徒は、就職に関して充実している点や 5 年間で高い専門性を身に付ける高専の制度が高専の魅力として捉えられていることがうかがえる。

表 2-3-6 志望動機 (名)

項目	R 2	R 1	H30
特色のある授業・カリキュラム	55	57	63
5 年一貫教育	97	72	77
早期専門教育	133	109	100
就職の実績	112	126	106
大学進学実績	26	26	40
専攻科	21	13	21
JABEE 認定	2	8	2
資格取得	36	21	25
教員	2	0	0
寮	10	11	9
立地・通学環境	7	8	3
施設・設備	39	38	39
校風	35	41	31
学費	8	14	14
ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン	24	16	12
課外活動	12	5	9
学校行事 (高専祭・体育祭等)	25	15	21
将来の夢の実現	125	113	109
学びたいことを学べる	80	89	81
海外留学・国際交流	38	28	59
家族・親戚	35	44	39
中学教師	4	11	10
先輩・友人	11	11	9
塾	5	3	4
特になし	0		
その他	1	1	0

【(設問6) 入学前に知りたかったこと】

表 2-3-7 に入学前に知りたかったことに関するアンケートの結果を示す。これは R2 年度から新しく設定された質問事項である。13 の項目から 5 つまでを回答可としている。「授業」や「学則」、「課外授業」や「留年・退学」の項目の数値が高く、入学前は高専生活の現場での様子や実態に関心があることがうかがえる。

表 2-3-7 入学前に知りたかったこと (名)

項目	R 2	R 1	H30
高校との違い	26		
授業	106		
インターンシップ	46		
進路 (進学)	24		
進路 (就職)	21		
学費	14		
国際交流,	43		
学則	89		
寮	42		
課外授業	72		
留年・退学	63		
満足度	34		
その他	0		

【(設問7) 『高専』という選択』を読んだことがあるか。】

表 2-3-8 に高専機構が作成した冊子『高専』という選択』を読んだことがあるかの有無に関するアンケートの結果を示す。年々読んだことのある新生の割合が減っており。本冊子の周知方法などを含めて今後の検討事項としたい。

表 2-3-8 『高専』という選択』を読んだことがあるか (名)

	R 2	R 1	H30
読んだ	63	54	38
読んでいない	146	155	169

【(設問8) 「キラキラ高専ガールになろう！」を読んだことがあるか】

表 2-3-9 に高専機構が作成した冊子「キラキラ高専ガールになろう！」を読んだことがあるかの有無に関するアンケートの結果を示す。読んだことのある者が 43 人 (全体の 21%) であった。令和 2 年の女子入学生は 58 名である。今後の広報物作成の参考にされたい。

表 2-3-9 「キラキラ高専ガールになろう！」を読んだことがあるか (名)

	R 2	R 1	H30
読んだ	43	107	132
読んでいない	166	102	75
(入学生のうち女子学生の割合)	58	66	49

## 2.4 4年次編入生アンケート

現在までに実施した2年次編入生アンケートの実施時期および回答者数等は次の表の通りである。今回は、令和2年度4年次編入生に対して実施したアンケートの分析である。

表 2-4-1 4年次編入生アンケートの実施時期および回答者数等

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
平成 19 年度	平成 19 年 4 月	11	11	100
平成 20 年度	平成 20 年 4 月	11	10	91
平成 21 年度	平成 21 年 4 月	7	7	100
平成 22 年度	平成 22 年 4 月	9	9	100
平成 23 年度	平成 23 年 4 月	12	12	100
平成 24 年度	平成 24 年 5 月	12	12	100
平成 25 年度	平成 25 年 5 月	13	13	100
平成 26 年度	平成 26 年 5 月	8	8	100
平成 27 年度	平成 27 年 5 月	11	11	100
平成 28 年度	平成 28 年 5 月	16	16	100
平成 29 年度	平成 29 年 8 月	12	12	100
平成 30 年度	平成 30 年 6 月	6	6	100
令和元年度	令和元年 6 月	12	12	100
令和 2 年度	令和 2 年 12 月	9	8	89

### 【所属コース】

エネルギー0名, 応用化学0名, 環境生命0名, メカニクス1名, 情報システム5名, 建築2名の合計8名。

### 【通学生・寮生の区別, 通学方法, 寮生活について】

8名の内, 通学生4名, 寮生4名である。通学生の通学方法は「徒歩」名, 「公共交通機関」2名, 「自転車」2名, となっており(複数回答可のため, 総数は一致しない), 1人が複数の通学方法を用いていることが分かる。

寮生活については, 3名が「心配ない」, 1名が「おおむね心配ない」と回答しており, 多くの者は寮生活に特段の不安は無いようである。この結果の背景の一部として, 本年度のアンケート調査の実施が例年と比べて遅かったため, 多くの編入生が寮生活にすでに慣れていたことがあると考えられる。

### 【有明高専の認知と情報取得方法】

有明高専の認知について, 「以前から知っていた」が4名, 「高校の先生」が3名, および「知人から」が1名となっている。「ホームページ」や「ポスター・パンフレット」と回答した学生が無くおらず, 昨年までの傾向とほぼ同様であった。本年度の特徴としては, 昨年後は比較的多かった「高校における学校説明会」が0に減少していることである。しかし, 高校の先生を通して情報が拡散することも考えられるため, 高校に対する本校の入試広報活動の継続は必要であると考えられる。

進路決定の際の情報取得方法(複数回答可)に関しては「ホームページ」が6名, 「ポスター・パンフレット等」が5名, と多く, 「高校の先生」からが7名と比較的多くを占めている。その他は「オープンカレッジ」が2名および「高校における学校説明会」と「知人から」がそれぞれ1名となっている。ホームページの利用や高校における情報の取得の数が多いのは昨年までと同様の傾向にあるが, 昨年と異なる本年度の特徴は, 「高校における学校説明会」の数が大きく減少していることである。この原因については, 現段階では判明できていない。

### 【受験決定時期と入学の決め手】

受験決定時期については、平成26年度は「2年2学期頃」、平成27年度は「2年3学期頃」、平成28年度は「昨年5月頃」、平成29年度は「2年3学期頃」、平成30年度は「2年3学期頃」、令和元年度は「2年3学期頃」が最も多かったが、本年度は「昨年5月頃」と「高校2年2学期頃」がそれぞれ2名となり、「締切直前」、「高校2年3学期頃」、「高校2年1学期頃」「高校1年頃」がそれぞれ1名となっている。昨年度までと異なる本年度の特徴としては、受験を決定している時期が分散化傾向にあり特定の時期に集中していないことである。

入学の決め手(複数回答可)は「大学に編入できる」、「経済性」がそれぞれ4名で最も多く、「高校・塾の先生の進路指導」が3名、「就職率が高い」と「学生教育がしっかりしている」がそれぞれ2名、「専攻科へ進学できる」、「寮がある」、「立地・環境」「設備」がそれぞれ1名となっている。例年と異なる本年度の特徴は、就職を指向する学生が減少して、現時点で進学を希望する学生が増加していることである。また、入学の決め手の多様化は昨年の傾向と同様と言えよう。

### 【入学後の心配】(複数回答可)

「学業」と「心配なし」がそれぞれ3名、「通学」が2名、「その他(内容不明)」が1名となっている。心配事の項目としては、例年のように「学業」に対する心配が一番多いがその割合は低下している。今後も、各コースでの編入生に対する学業面での出来る限りのサポートを期待したい。また、学校や寮での不安があげられなかったのは、本調査の実施が例年より遅かったことが影響していると考えられる。

### 【アドミッションポリシーに対する意識】

アドミッションポリシーを「意識した」が6名、「意識しなかった」が2名となっており、「意識した」と回答した学生の割合が昨年度より増加している結果となった。入試広報などによる、より一層のアドミッションポリシーの周知徹底が必要であると考えられる。

### 【高専卒業後の進路について】

「就職」が3名、「専攻科進学」が1名、「大学編入学」が4名となっている。本年度の特徴は例年と異なり、前述したように進学希望者の割合が増加していることである。また、「考えていない」と回答した者はおらず、概ね入学時に進路に関してある程度目標を持っていることが分かる。

### 【有明高専への要望、自由意見】

要望の記載は見られなかったが、自由意見では「4年生は進路について考える時間が今のところ少なく、進路でかなり悩んでいる」という記述が見られた。編入生の学業面に関する不安な心情が優先されて、未だ将来を考える余裕のなさが読み取れるようである。教員や友人を中心とした、周囲の幅広いサポートを期待したい。

本年度の本調査の結果を見ると、例年の傾向から少し変化が出てきているように思われる。例年は質問項目における回答がある部分にある程度集中する傾向があったが、本年度はどの項目も回答項目が拡散し、多様化しているように感じられる。これは、本年度の本調査の実施時期が例年より遅かったことが原因の一つと考えられるが、本校に関する情報の取得方向の多様化や、将来の進学希望の増加など、今までとは明らかに違う傾向が顕著化してきているように感じられる。編入生は少なからず新しい環境、特に高専での学業面に不安を抱えている学生が多い。全学生からすると編入生の割合は少ないかもしれないが、編入制度は本校にとって学生確保のための重要な制度となっている。専門コースを中心とした、編入生が新しい環境に早く慣れるような、学業面を中心としたサポートを今後も期待したい。

### 3. あとがき

本校の教育システムならびに教育プログラムを継続的に改善・向上するために、本委員会ではH14年度から毎年アンケートを実施し、集計・分析そして報告活動を展開しています。本調査報告書は16回目の発刊を迎えます。今回はR元年1月からR2年10月までのアンケート実施分を主として整理し、前回(第15回報告書)とそれ以前のものに記載された各項目と対比して分析したものです。

今回のアンケート集計・分析の結果、継続的改善・向上という観点から評価すると、本校の教育システムならびに教育プログラムは、全般的に良好な状態を維持していると言えます。ただし、依然として改善あるいは経過観察を要する事項も見受けられます。

卒業時アンケートでは、準学士課程の【教育全般の総括に関する設問】において、『一般教育』では、全学的には、前年に引き続き約9割の学生が「おおむね満足している」以上の回答を示し、良好な結果が得られました。『専門教育』でも、全学的には、『一般教育』と同様に9割以上の学生が「おおむね満足している」以上の回答を示し、比較的高評価が得られました。ただし、『一般教育』と『専門教育』の両方で、「満足している」と回答した学生の割合は、この数年連続して減少傾向が連続しています。学生側の価値観の多様化などの背景が考えられますが、今後の変化を注視していく必要があると思われます。また、『自分自身に実力がついたと思うか』の設問に対しては、「身についたと思う」と「おおむね身についたと思う」の二つの項目に約8割の学生が回答しており、比較的良好な数値を示しています。ただし、『勉強以外の学校生活について』の調査結果では、この数年で学生の満足度の度合いが低下していることが明らかになっています。この事は、この数年の学校行事の内容変更によるものかもしれませんが、今後学生会などと連携して対応していく必要があるかもしれません。

専攻科修了時のアンケートでは、【教育全般の総括に関する設問】、【各教科の教育に関する設問】について、ここ数年、いずれの項目においても概ね80%以上の『満足度』が得られており、大きな問題はないと考えられます。【各教科の教育に関する設問】では昨年度までと同様に、創造設計合同演習と地域協働関連科目に関する必要性和到達度の認識の低さにおいて学生の意識は依然低い傾向にあるため、これらの科目に関して見直しが必要ではないかと思われます。また、TOEICに関する学習支援体制の満足度は昨年と同様に低く、満足度を得られた学生の割合は6割以下にとどまっています。『国際性』を目標の一つとしている本校にとって、英語力向上のための支援体制強化は急務であると思われます。学会発表や各専攻における特別研究発表会に関しては、学生の『満足度』もかなり高い結果が得られたが、昨年と同様に、ポスターセッションについては半数以上の学生がこの行事に不満を感じているという結果が出ており、この点については今後検討する必要があると思われます。

本調査報告書が、関係組織・部署、各教職員の学校の教育システム・プログラムの継続的改善・向上に資することを切に願っております。そのためには、本調査報告書を用いて本校の教育システム・教育プログラムに対する学内外からの評価を適確に掌握して頂き、そして、各関係組織・部署等で共通認識に基づいた改善・向上が実現できますことを期待します。

最後に、各種アンケート調査にご協力・ご尽力、ならびにご支援頂きました関係各位・各組織に深く感謝の意を表します。

自己点検・評価委員会  
委員長 中島 洋典 (一般教育科)  
副委員長 石丸 智士 (創造工学科)  
池之上 正人・大河平紀司・篠崎 烈  
ゴーチェ・ロヴィック・加藤浩司 (創造工学科)  
竹内 伯夫 (一般教育科)  
事務担当 七田 忠資 (総務企画係)